

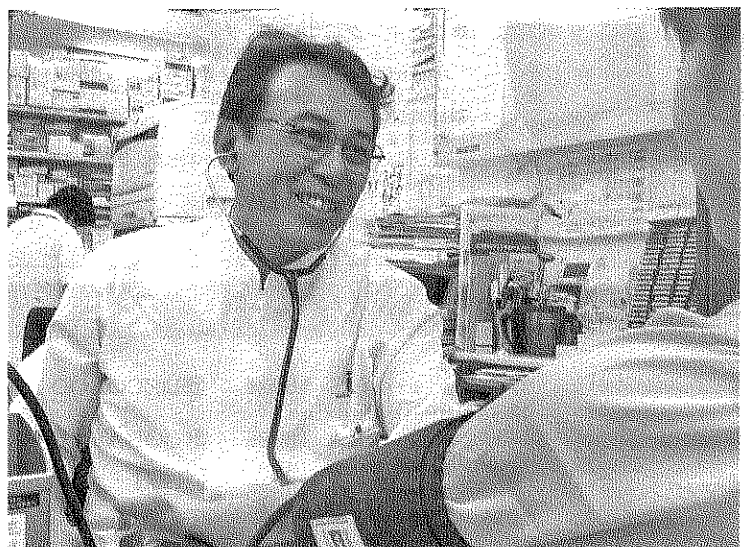
総務省の最新調査によると、わが国では65歳以上の人口が今年初めて3000万人を突破、4人にひとりが高齢者の時代を迎えた。世界有数の長寿国・日本だが、長生きが必ずしも幸せとはいえない現実もある。そんな現実を「石を投ずる書が、さきさきのブックマン社から刊行され、話題を呼んでいる。開業医・長尾和宏氏が書いた『平穩死』10の条件』だ。7月半ばの発売直後から版を重ね、テレビなどにも取り上げられて現在7刷、9万部。語り口は平易だが、そこにはこれまで日本の医療や社会が目を向けてこなかった、重要で画期的な問題が提起されている。

(本紙・声原真千子)

8割が病院で亡くなる

「僕はこの本を、なる かし8割が病院で亡くな べくたさんの人に読ん っている現代の日本で、 でもうたいたい。町で僕の そんな最期を迎えるのは 顔を見た人が、『あ、平 穩死のおっちゃんや』と 言ってくれるくらいにな ったらええなあ」と笑い ながら話す長尾氏。

もともと「平穩死」と いわれても、大方の人は た。がんや脳 卒中などの病 は命の終わりが近づいた の末期に、病 院で施される 延命治療で、 患者が無理に 死ぬ。それなら自分も 望む人は多いはず。し



診察中の長尾和宏医師

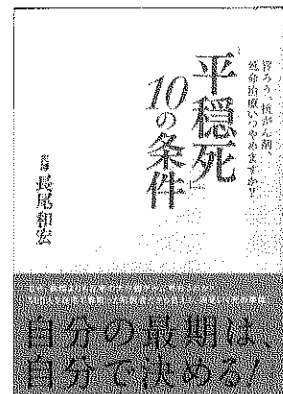
開業医が提起する「自分らしい最期」

『平穩死』10の条件』ブックマン社が話題

胸水、腹水は安易に抜くな」「誤嚥しながら生きるのが人間なぞ」これまでの常識や思い込みを、根底から覆す記述も多し。

本書を企画し、長尾氏に執筆を依頼したのは、ブックマン社編集部の小宮里氏だ。友人の経験を通じて「胃ろう」に当惑をもちた小宮氏は、当初はそれをテーマに本を作りたいと考えた。

経口で食事ができない患者の胃に管を通して人工栄養を入れる胃ろうとは、一般的な治療法だが、延命治療として行う場合の問題点も指摘されている。小宮氏は「胃



本体1333円

医療の常識・思い込みを覆す 延命治療せず在宅で平穩死

24時間、在宅医療に取組み 実例豊富で説得力ある内容



小宮里氏

るうについて調べていく「平穩死」のテーマに行こう。延命治療に行き着いたんです」と返りたり、結局、長尾先生と返る。

長尾氏の「平穩死」へ医療にとって必要だと感のこだわりは、勤務医11年、在宅医17年の医師人生で、1000人以上の言葉は、本書のオリジナルではない。2010年、東京・世田谷の老人ホームの医師、石飛幸三氏が著書(講談社刊)『平穩死』のすすめ』で用いたのが最初のようである。「自分の信念や実践してきたことの意味を裏付けてくれた」本は、生涯忘れられない1冊だ

ち、在宅での死と病院での死では、最期の苦しみ が全く違うことに気づいた。在宅での死は、どんな病気であれ、ほぼ全てが「平穩死」だったのだ。その違いは何なのか？人間にとって望ましい死とは？「自分の最期は自分で決める」生き方はどうすればいいのか？これらの疑問と表現をライフワークとする長尾氏は今、大勢のスタッフと協力して、24時間体制で地域の在宅医療に取り組んでいる。小宮氏は、そんな長尾氏の取組みこそ、これからの日本社会と

刊行後、口コミなどでひびくにつれて4刷、4万部に。9月5日にはテレビ朝日の情報番組「ワイド！スクランブル」で

中村仁一氏が「大往生したげりや医療とかかわるな」(幻冬舎)を上梓。20刷、50万部(10月2日現在)のベストセラーとなった。

「大往生」とはつまり「平穩死」。その中村氏の著作は、「親切な患者さんか、長尾センセイもこれ読んで勉強しなれ」ともって読んでくれた(笑)。

読後、内容が自分が書こうとしていることと重なると感じた長尾氏は、小宮氏に同じテーマの本を出す意味があるのかと問うた。小宮氏は、「老人施設ではなく生活の場で、老若男女様々まな人を診てくれた先生であれば、書けないことがあるはず」と企画を引っ込めなかった。

センセイショナルなタイトルとブラック・ユーモアあふれる「大往生」に比べて本書は取っつきやすく、実例豊富で説得力に富む。「ABCがハ」ウチの高齢の患者さんにもわかってもらえようという思いで」と長尾氏。

映画監督の山本晋也氏が、長尾クリニックを訪ねて取材。山本氏は、「自分にとっても他人事ではないテーマ」として、本書も力を入れて紹介してくれた。その後から再び大きく動き、累計9万部に達した。

書店員のなかにも、本書に共感する人がいる。リプロ池袋本店の矢部潤子氏は、がんで闘病生活を送っていた実父を、自宅で看取った翌日、本書を読んで納得し安堵感を覚えたという。

在宅での看取りは、父の希望だった。だが時にはこれだけのだろっかと迷ったことも。本書によって、その選択が問

9万部のヒット 読者の7割は60代以上の女性

「10年前に出会いたかった」

「ところで読者は、読者ハガキを見る限り、7割が60代後半以上の女性。小宮氏は今年前、続編と合せて65万部に達した『女医が教える本』に気持ちはいい。『死』を肯定せず、真に向かい取り上げたい本など、とんでもないはないのかも知れない。

「10年前に出会いたかった」という感想は、まさに同じ年齢層の男性だったと云う。『10年前にこの本と出会った』という感想も全く同じ(笑)。女性がほづが介護や死について、シリアに現実を直視しているの、というか、小宮氏は苦笑する。

ただし、長尾、小宮両氏ともに「一番読んでほしいのは、医師をはじめとする医療関係者」と。これからの日本の医療は、死・敗北をみなし、「延命」を至上命令としてきた。その視点は医師にのみ。長尾先生が、道行く人から「平穩死のおっちゃん」と呼ばれるようになる日も、そう遠くないかもしれない。